

東北海道現代俳句協会会報

第20号

発行人・石川 青狼
編集人・鮎橋 郁香
令和七年七月十七日

第三十四回 北海道現代俳句大会開催

今年度の北海道大会は、実に八年振りに釧路に於いて開催されました。四地区持ち回りで開催しているものですが、前回（四年前）はコロナ禍の真っ最中だったため、紙面での開催を余儀なくされたのでした。

六月八日（日）午後一時より釧路センチュリーキャッスルホテル鶴の間での開催で、投句総数は五四六句。夜来の雨も上がり、札幌を始め北は枝幸町、南は函館市などから五十三名もの方々の御出席を戴きました。

開会の辞に始まり、物故者への黙祷、石川青狼会長の挨拶に続き、いよいよ五十嵐秀彦・中北海道現代俳句協会会長の講演「飛ばない鳥は飛ばない鳥」俳句を（読む）ということゝが始まりました。俳句に限らず他の文芸の鑑賞にも通じる内容で、時おり笑い声が響くなか、大いに考えさせられるものでした。



講演中の五十嵐秀彦氏



北海道現代俳句協会賞
江波戸 明さん

休憩を挟んでの俳句大会表彰式では、札幌の石井美穂（びぜん）さんの作品が一位となりました。（作品は後記）
その後の懇親会は一階の海の間に移動し、三十四名が出席。午後七時発の列車時間を気にしながら、最後は「五・七・五締め」で、名残りを惜しみつつのお開きでした。

◎第三十四回 北海道現代俳句大会 入賞者

六月八日（釧路）

- 第一位 早春を食べる分だけ採りに行く 石井 美髯
- 第二位 春炬燵みんな途中でみなくなる 松山 りさ
- 第三位 風に散る手紙が蝶になる処方 中西 芳之

・東北北海道現代俳句協会賞

手話といふ魔法の指のあたたかし 小宮 富子

・中北海道現代俳句協会賞

かたつむり登りきったら鳥になれ 相吉 香湖



=佳作賞入賞者=
石川青狼会長と、
左上から時計回りに
寺田保子、田子健志、
吉田水原、菅原

・北北海道現代俳句協会賞

路線バス消えて蕨の太くなる 江波戸 明

・南北北海道現代俳句協会賞

木の根明く仔牛の耳にはや名札 三国 眞澄

以下関係分

佳作賞 風花や赤子たひらに渡さるる 吉田 洋子

同 わたしだけ画質が粗い春の風邪 菅原 釈子

同 訪ねれば家ごと老いて赤のまま 寺田 保子

同 鳥帰る胸の奥にも水平線 粥川 青猿

同 蒲公英や鍵の掛からぬ街となり 清水 健志

・五十嵐秀彦 中北海道現代俳句協会会長特選句

遺品みな陽炎の住み処歯が痛い 斉藤 郁子

・橋本喜夫 北北海道現代俳句協会会長特選句

路線バス消えて蕨の太くなる 江波戸 明

・佐藤日和太 南北北海道現代俳句協会会長特選句

名前とは祈りの言葉卒業式 菅原 釈子

・石川青狼 東北北海道現代俳句協会会長特選句

搔卷や夢に湯灌の巨きな手 菅原 釈子

ご入賞の皆様、おめでとうございます。

※会員の作品は後記しております

《講演を聴いて》

この度の講演では、何より講師の五十嵐秀彦氏御本人が一番楽しそうに講演なさっていたのが印象的で、私達もそれは楽しく耳を傾ける事が出来、感謝の気持ちでいっぱいです。

その中でも特に私の印象に残ったお話の幾つかを御紹介したいと思います。

「文芸としての俳句は言葉、文字、言葉があるが、その意味以上のものを人に伝える力がある」「他人の評価は参考にしない。良いか悪いかは自分で判断する」

「自分がうまくなつたと思つた時は坂を転げ落ちていく時だ」

又、難解句については「人の句を難解と思う人は、説明が出来ないという事に納得が出来ない人である」更に、「俳句を読むことで何と向き合うかということ、読者自身(の姿)と向き合っているのだ」等々。私にとつて、ストンと腑に落ちることばかりでした。

そして、軽いジョークを交えながらの時間は、言葉の海に酔いしれて、この上なく濃密だった事は言うまでもありません。

(村川三津子)

◎第三十四回 中北海道現代俳句大会

四月六日(札幌)

一位 日向ぼこ少し壊れた人という 松原 静子

おめでとうございます！



Ⅱ 今後の行事予定 Ⅱ

☆第十回東北海道現代俳句協会賞

作品募集：八月。選考会議及び発表：十一月
十五句（新作に限ります。句題を付けること）

☆合同句集「東北海道現代俳句」第七集

作品募集：九月

十五句（自選作品。新作・旧作問いません）

皆さん、ご準備ください♪

令和七年度 第三十五回定時総会

昨年より定時総会と俳句大会を同日開催することになっておりましたが、今年は第三十四回北海道現代俳句大会が釧路で開催されることになっており、その準備もあるため対面の総会は難しいとして役員各位に諮りましたところご理解をいただきましたので、紙上の開催とさせて頂きました。



平成六年度の事業報告のうち大きなものとして、現代俳句協会が一般社団法人となったことにより会員の所属が選択できることになったことで、他地区在住の方でも釧路所属となります。それから新たに地区会員制度を創設し、「初めての俳句教室」を開催したところ六名の方が地区会員として入会してくださいました。

また当協会と他団体との共催事業として、フットパス句会（八月）や夕日フットパス（十一月）が行われ、そのときの俳句作品を短冊にして米町ふるさと館（や市役所展示ロビー）にて展示いたしました。

大きな出来事としては、永年にわたり当協会を牽引してくださった鈴木八駄郎さんが令和六年九月十九日、満九十九歳にて逝去されたことです。令和五年七月、帯広で開催された俳句大会での石川青狼会長とのトークセッション「鈴木八駄郎と俳句」に於ける、衰えを知らぬ熱い語り口が今も脳裏に焼き付いております。改めまして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

令和七年度の事業計画としては、やはり六月開催の第三十四回北海道現代俳句大会（終了）と、秋の第十回東北海道現代俳句協会賞、合同句集「東北北海道現代俳句 第七集」の発行があります。また初心者向け俳句教室「土曜俳会」の継続や、十月には第三回くしろ元町フットパス句会があり、どれもたくさんのご参加をお待ちしております。

今年度の収支予算は北海道大会開催のため金額が大きくなりましたが、無事承認して頂き、大会も皆様のご協力のお陰をもちまして恙なく終了することができました。

早くも今年の前半を経過してしまいましたが、足許を見失うことなく、皆様のお力をお借りしながら協会運営に携わって参りたいと存じます。

今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

事務局長 鮎橋郁香

釧路現代俳句会 月例会句会

一月

初夢や円空仏のほほゑむる
 一月の全影は鶴の一声
 うたたねや今どこ何時冬入日
 雑煮餅鳥獣戯画の蛙跳ね
 ルンバルンバひとりひと間の年の暮
 五才引く若見えメイク初鏡
 じいちゃんと孫が大好き栗きんとん
 けあらしの立ち上る中飛びゆくは
 巨船一隻元日の海眠る
 笑うたび手を打つ人やお元日
 老いらくの飯寿司に酌める年の酒
 初あかりこの身に受けて空を喰む
 大海の遊泳の果て鯨汁
 山盛りの去年のお札初詣
 親鶏よ加減自在でせちのだし
 療法士の音吐朗々深雪晴
 去年今年コビベに一本こじいれる
 椀に浮く加賀の花麩の雑煮膳
 重箱の均衡くづれ三日かな
 おせちにはゴツツイきんぴら母の味
 静かなるしんしん雪夜それも良し
 雪だるま明日来ると云ふ人を待つ
 賀状軽し電動バイクも軽き音
 年賀のことばルビふるやうに夫へ
 ごまめ囓む余生などまだ宵の口
 急かされてぶうと膨れる雑煮餅
 寝て覚めて正月料理とは無縁

荒川 美恵
 飯沼 風華
 石井 ゆかり
 小飼 紫香
 斉藤 郁子
 坂下 裕子
 佐藤 かよ子
 柴野 美幸
 清水 健志
 菅原 釈子
 寺田 保子
 中尾 克彦
 中島 加奈
 中村 きみどり
 中村 凡
 西村 奈津
 芳賀 知子
 早川 千鶴子
 鮎橋 郁香
 三島 千寿姫
 三原 美香
 横地 妙子
 よしざね 弓
 吉野 喜代子
 脇本 文子
 脇本 千尋
 石川 青狼

二月

使いさし後生大事や残る柚子
 ちぐはぐに残る錠剤春立ちぬ
 検診後老舗のグラタンマスク取る
 弓形の公魚弾む皿の中
 くちびるや解き放たれてリアル春
 バスを待つ紺のマフラーミラノ巻き
 残りもの集めてスーパ寒波来る
 餌台で土俵入りかな寒雀
 雪無くば馬追の土奮い起ち
 長靴の暗部は丸く春動く
 屋根すべる雪に暖気の韻ありぬ
 今は只雪無き日々の有難き
 青空や白一点のシマエナガ
 雪しまきのど飴ほどの太陽やーい
 節替り銅像の肩軽くなり
 古本屋憧れ人は黒ブーツ
 梟やぬらりと逸らす視線
 触るから触れるに変わる春心地
 冬銀河来世とは良き処かも
 節分や青鬼の熱下がりしか
 暖冬や未完リンクの待ちぼうけ
 大寒や手袋の中痛む指
 武者修行鶴大勢に誘われて
 おかほりに眼鏡くもらす鍋こはし
 寿司折をすつかり忘れ夜鷹蕎麦
 身中の鬼甘やかせ鬼やらい
 (だいじょうぶ)の魔法をかけて春シヨール
 満作は控え目に言ってうれしいです
 待春やひっくり返す砂時計

荒川 美恵
 飯沼 風華
 石井 ゆかり
 小飼 紫香
 斉藤 郁子
 坂下 裕子
 佐藤 かよ子
 柴野 美幸
 清水 健志
 菅原 釈子
 寺田 保子
 那珂 剣坊子
 中尾 克彦
 中島 加奈
 中村 きみどり
 中村 凡
 西村 奈津
 芳賀 知子
 早川 千鶴子
 鮎橋 郁香
 三島 千寿姫
 三原 美香
 村川 三津子
 横地 妙子
 よしざね 弓
 吉野 喜代子
 脇本 文子
 脇本 千尋
 石川 青狼

三月

みつ豆の流れだしたる地震記憶
春光や相語りいる風と風
ラッセルの回転灯やまた眠る
饒舌に問いかけてくる大浅蜷
眉描けばひとまずわたし春コート
よもぎ摘み香り広がり母思う
ほうけた人とほうけたように春を待つ
啓蟄やつてみやうかみみかざり
寒風や港修理のクレーン船
燈台を嘯まずに飲んだ寒怒濤
正門を描き損じては臍めく
すれ違ふ車窓いきなり雪解水
スズメ来て餌を啄む根開けかな
戦さとは戦ぐとも読み春浅し
梅の花種の堅さをまだ知らず
春風や背中で跳ねるランドセル
告解のあつけらかと花辛夷
実感が季語に追いつく啓蟄や
空の青無垢の水柱に嫉妬する
折れづらき替芯探し弥生尽
生真面目な母の筆跡春の雪
雨音のごと屋根の雪春動く
三月の街角ピアノは行進曲
信子忌のリボンの青き春帽子
休職の二年目に入る星朧
祖母・母にかなの名前や水仙花
伸びしろの果てはどこまで春の海
うろうろといがい吐きぬ雪解川
啓蟄やキャンセル待ちの搭乗券

荒川 美恵
飯沼 風華
石井ゆかり
小飼 紫香
斉藤 郁子
坂下 裕子
佐藤かよ子
柴田 俊子
柴野 美幸
清水 健志
菅原 釈子
寺田 保子
中尾 克彦
中島 加奈
中村きみどり
中村 凡
西村 奈津
芳賀 知子
早川千鶴子
鮎橋 郁香
三島千寿姫
三原 美香
村川三津子
横地 妙子
よしざね弓
吉野喜代子
脇本 文子
脇本 千尋
石川 青狼

四月

これよりは我が道をゆく雪解水
そこそこに生きてざっくり春キャベツ
玄関が靴で賑わう啓蟄
庭園の水辺に佇む紅しだれ
花辛夷卵サンドにかぶりつく
蛇苺一筋縄で老いぬこと
露のとう踏まれてもなお空仰ぐ
うかうかと歳を重ねて喜寿の春
春星の饒舌なるや通夜帰り
東根室駅の最終列車春満月
玫瑰の新参の棘揃いたり
あいうえお表に欠番春の星
挨拶の達者なにより彼岸餅
散る桜その一枚となる安堵
春光や犬のコートを折り畳む
街は春ベダル軽やか「裕次郎」
たんぽぽやぼんやりと立つ停留所
春暁や湯の沸くまでの自失
キウイの皮うすくうすくむく雨水かな
六十年超えし父の忌たびら雪
万愚節うそ無き空に深呼吸
台所並んで作る桜餅
刺すような納骨堂や四月過ぐ
うららかや赤子のつむじ左巻き
蝌蚪の紐死産の妹の分も生く
水影のささめくルーフ木の芽風
ほんとと云う嘘あかるくて花ミモザ
使用感あふれる昭和春夕焼
朧おぼろオブラートに包まれている

荒川 美恵
飯沼 風華
石井ゆかり
花 林 音
小飼 紫香
斉藤 郁子
坂下 裕子
佐藤かよ子
柴田 俊子
柴野 美幸
清水 健志
菅原 釈子
寺田 保子
中島 加奈
中村きみどり
中村 凡
西村 奈津
芳賀 知子
早川千鶴子
鮎橋 郁香
三島千寿姫
三原 美香
村川三津子
横地 妙子
よしざね弓
吉野喜代子
脇本 文子
脇本 千尋
石川 青狼

五月

四月雨水真直なるもの映しをり
 聖五月変化球なる老いを受け
 屈性と言うらしい君芽吹き待ち
 ストリートバスケの響く木の芽時
 装丁のカラージュ巧み昭和の日
 ほうれん草甘し囁きは悪びれず
 薫風の素足まぶしき女学生
 野良仕事桜の下で握り飯
 菜の花はこきつと固め夫好み
 食堂の窓より見えしクロッカス
 天気図はゴッホの渦動さくらの芽
 囀やふたつずつ打つホッチキス
 春園舎転勤族の熊二頭
 空からの「風の塔」みゆ春の海
 宿替えのヤドカリ後ろ振り向かず
 春の鳥ルージュの色は新色で
 響きくる五月の空に労働歌
 逃水や会話の始点が見つからぬ
 クロッカス誰のものでもなく蒼く
 過去追はず目一杯生き花万朵
 飯橋のセンチライン海市まで
 浅池の学校はじまるカエルの子
 どぶ浚え我が心へと続く道
 青き踏む卒寿の呼吸をととのへて
 イトムカの川は銀色岩燕
 桜待つシフォンケーキのやうな朝
 泣き言は捨ててさばさば夏の海
 その勝ち気いつまで続く花曇り
 ゴールデンウィーク一報「いのちのバスケット」

荒川 美恵
 飯沼 風華
 石井ゆかり
 花 林 音
 小飼 紫香
 斉藤 郁子
 坂下 裕子
 佐藤かよ子
 柴田 俊子
 柴野 美幸
 清水 健志
 菅原 釈子
 千 寿 姫
 寺田 保子
 中島 加奈
 中村きみどり
 中村 凡
 西村 奈津
 芳賀 知子
 早川千鶴子
 飯橋 郁香
 三原 美香
 村川三津子
 横地 妙子
 よしざね弓
 吉野喜代子
 脇本 文子
 脇本 千尋
 石川 青狼

第三十四回 北海道現代俳句大会 会員抄

六月八日 釧路市

雪の夜の種火のような蕎麦処
 寒に入る背骨伸ばせば骨の声
 来し方の記憶は風化彼岸西風
 空っぽの故郷を貪る深雪
 太陽の子があふれてるふきのとう
 遺品みな陽炎の住み処歯が痛い
 後れ毛に葬の残り香暮遅し
 春憂嘘は百葉誠は毒葉
 われのみの一間でありし雛飾る
 切なさの理由のひとつ 朧月
 片陰やたましい一つ捨ててある
 満月と寒木とわたし見つめ合う
 雪のひま菜園作り練り始め
 ゆつくりと歩いて街の春惜しむ
 冬かもめ平常心だけ下さい
 年少組の交はす喃語やクロッカス
 自分にも少しやさしく春キャベツ
 ベ切の一句きまりて桜餅
 地虫続出写真判定だな
 雪解風痛し会ひたき人一人
 看取る手に握り返されあったかい
 クレソンよ似合うはきつと霧の夜
 巣立つきみ母のためにと犬を飼う
 千枚の個人情報青嵐
 春満月ひとり溶けかかっている
 朧夜の息継ぎ困難な詩だ

松原 静子
 早川千鶴子
 中島 土方
 飯沼 風華
 中村きみどり
 斉藤 郁子
 飯橋 郁香
 金野 克典
 横地 妙子
 小飼 紫香
 山本 勲
 石井ゆかり
 三原 美香
 坂下 裕子
 中島 加奈
 吉野喜代子
 佐藤かよ子
 柴田 俊子
 村川三津子
 荒川 美恵
 伊藤 やす
 中村 凡
 千 寿 姫
 よしざね弓
 西村 奈津
 石川 青狼

「土曜俳会」

昨年八月から始めた「初めての俳句教室」を、今年四月より「土曜俳会」と名を変えて再開。初めは三名だった受講者が今では七名となり、月例会会へ参加されたり、地区会員として登録された方もおられます。

講座の前半は作句に於ける基本的な知識を学び、後半は兼題を使った作品を中心に句会形式の内容としています。会員の募集には期限がありませんので、いつでも事務局・鮎橋へご連絡ください。

◆◇作品抄◆◇

丹頂の踵意のままボレロ舞う	小飼 紫香
冬晴れや青信号のつづく道	千 寿 姫
生き生きとかまくら作る赤い頬	三原 美香
刺青の蛇眠らずや絹ショール	清水 健志
人形の生あるごとし春の闇	鮎橋 郁香
束ねた本春高山に置いてきた	石井 ゆかり
辛夷咲く私だけの窓開く	西村 奈津
春の雲渚に集うヒドリガモ	柴野 美幸
風薫る浅草地下の焼きそば屋	斉藤 郁子
薫風やつかみぐあいは母の乳	中村 凡
五時チャイムの「恋は水色」風薫る	坂下 裕子
風薫る空気圧よし方位よし	石川 青狼

【会員動向】

現在会員数 四十二名 うち地区会員 七名

入会 柴田 俊子（釧路市）

花林音（かりんと・釧路市）

入会地区会員

坂下 裕子（釧路市）

青山 醉鳴（札幌市）

《編集後記》

六月は八年振りの北海道現代俳句大会が釧路に於いて開催され、無事成功裡に終えることができました。ひとえに皆様のお陰と、心より感謝申し上げます。

そこではっと気が付いたら庭の草が伸び放題、まだまだ暑い日が続きそうです。

皆さま、どうぞお健やかに…。

（郁）

